4章　中世2

問題

【1】

解説

【着眼点】

東大の中世で文化史が出ることはさほど多いとはいえない。過去には，94年に鎌倉時代末期から南北朝期にかけての文化の特徴，99年に室町時代の文化の特徴を問う問題，2012年に鎌倉仏教を問う問題が出題された。94年と99年の問題は，多少の時期のずれはあるものの，民衆の成長による支配階級の文化と民衆の文化の融合と均質化という中世の文化の特徴を問うものであった。

今回の出題は，室町時代の仏教に関して，臨済宗が幕府と結びついたことによって支配階級の文化に禅宗的・中国的要素が色濃く現れたことと，民衆への布教に成功した一向宗と法華宗という2つの宗派の比較を問うものである。A・Bともに指定字数が少ないので，基本的なことを答えれば十分である。

【知識の整理】

●宋から渡来した僧侶

1279（弘安2）年に南宋は元に滅ぼされるが，それに前後して，南宋の禅僧が日本に渡ってきた。主な僧侶は以下のとおりである。

●蘭溪道隆（らんけいどうりゅう）（1213～78）

：1246（寛元4）年に来日した。博多・京都で過ごした後に鎌倉に下った。北条時頼は蘭溪道隆を大船の常楽寺に住まわせ，1249（建長元）年には巨福呂坂（こぶくろざか）の切通の外に建長寺の前身となる禅院を創建し住持とした。文永年間に蒙古の圧力が強まると，蘭溪道隆は蒙古のスパイの嫌疑をかけられ2回にわたって甲斐に流された。1回目の配流後は鎌倉に戻り寿福寺の住持となり，2回目の配流後は建長寺の住持となり，そこで没した。遺著に『大覚禅師語録』がある。

●無学祖元（むがくそげん）（1226～86）

：蘭溪道隆の後任を求める北条時宗の使いに応じて，1279（弘安2）年，南宋の滅亡直後に来日した。師の環溪惟一の代わりとしてであった。鎌倉では，初め建長寺に住し，のちに山之内に円覚寺が創建されるとその開山となった。遺著に『仏光国師三会語録』がある。

●兀庵普寧（ごったんふねい）（1197～1276）

：蘭溪道隆らの招きで1260（文応元）年に来日した。北条時頼は彼を招いて建長寺の第2代住持とした。建長寺の本尊は，本尊としては珍しい地蔵菩薩である。これに関して，兀庵普寧は，自分は仏で菩薩より上であるからと最後まで仏殿を礼拝しなかったという逸話を残している。こうした誇り高さも災いしてか，時頼の死後は理解者を得ることができず，1265（文永2）年に帰国した。

●一山一寧（1247 ～ 1317）

：フビライは弘安の役の後も日本に朝貢を求める使者を送ることを試みたが，その一環として来日したのが一山一寧である。もっとも，彼が博多に着くことができたのはフビライの死後の 1299（正安元）年のことであった。一時伊豆修禅寺に幽閉されたが，北条貞時の帰依を得たことで建長寺の住持となり，のちに円覚寺に移った。晩年は，後宇多法皇の招きで京に上り，南禅寺の住持となりそこで没した。禅宗のみならず，その影響は朱子学・書道・文学などにも及び，ことに文学の面では五山文学の祖ともいわれる。

●日本から中国に渡った僧侶

問題には「日本からも多くの禅僧が海を渡った。」とあるが，教科書レベルで出てくる人物では臨済宗の開祖栄西と曹洞宗の開祖道元以降，海を渡ったと明示される者は残念ながらいない。解答の作成に際してはそうなのだろうと思うしかない。２・３例を挙げておく。

●円爾（1202 ～ 80）

：東大寺で受戒し，のちに臨済宗に転じた。1235（嘉禎元）年に渡宋して径山に学び，1241（仁治２）年に帰国する。九条道家が創建した東福寺の開山となり，1257（正嘉元）年には北条時頼の招きで寿福寺に住持した。

● 中巌円月（1300 ～ 75）

：1325（正中２）年から 1332（元弘２・正慶元）年にかけて元に渡り学ぶ。帰国の翌年に『原民』『原僧』の２篇を後醍醐天皇に献呈した。

●絶海中津（1336 ～ 1405）

：1368（正平 23・応安元）年から 1378（天授４・永和４）年にかけて明に渡り学ぶ。その間，洪武帝（朱元璋）に招かれ法要を行い，その際に詩を作り賞賛されたという。1383（弘和３・永徳３）年には相国寺鹿苑院に入る。翌年足利義満と衝突して諸国を流浪するが，のちに義満に呼び戻され，相国寺で没した。五山詩文の最高峰と称される。

因みに，問題文中に「外交使節にはおもに五山の禅僧が起用された。」とある。1401（応永８）年の第１回の遣明使節の正使となった祖阿は時宗の僧と考えられ，国書の作成者も公家であったが，第２回以降はすべて使者も起草者も五山の禅僧となった。

●鎌倉仏教

今回の問題では範囲外だが，鎌倉仏教について知っておくべきことを表にしておく。

宗派名	開祖	開祖の主著	キーワード	主要寺院
浄土宗	法然	『選択本願念仏集』	専修念仏，他力易行	知恩院
臨済宗	栄西	『興禅護国論』	公案	建仁寺
浄土真宗	親鸞	『教行信証』	悪人正機説（『歎異抄』）	（本願寺）
曹洞宗	道元	『正法眼蔵』	只管打坐（『正法眼蔵随聞記』）	永平寺
時宗	一遍		踊念仏，遊行	清浄光寺
日蓮宗	日蓮	『立正安国論』	法華経，題目	久遠寺

上記の宗派名はだれでも知っているものだろう。しかしこの名称が鎌倉時代からあったと考えると，それは大きな誤解である。例えば浄土真宗だが，親鸞自身は師法然の，我々が浄土宗の名前で知っているところのものを浄土真宗と呼び，自分がその正統な後継者であると主張した。江戸時代に東西本願寺から宗派名を浄土真宗としたいとの願いが幕府に出されたが，浄土宗側から強い反発が起き実現しなかった。浄土真宗という宗派名が公認されたのは実に明治期になってからのことなのである。したがって，室町時代の本願寺門徒は自分が浄土真宗に属しているという意識はなかった（Ｂの解答には浄土真宗ではなく一向宗を用いたほうがよいと思われる）。

同様に，教科書の鎌倉文化の仏教史の部分には，この鎌倉新仏教６派が中心に描かれ，旧仏教では法然を批判した貞慶（じょうけい）や明恵（みょうえ），そして律宗を再興したとされる叡尊（えいそん）・忍性が付け加え程度に触れられているにすぎない。そのことで，鎌倉時代の宗教地図はそのほとんどがこの６派によって色分けされていたと理解すると，それもまた大きな誤解である。これはあくまで思想史の問題である。鎌倉時代に始まり，のちに宗派を形成して今日に至る各宗派を，その発生時点において論じたものにすぎない。江戸時代に安藤昌益という思想家がいる。彼が青森県の八戸で『自然真営道』を著し原始共産制的な社会を「自然世」と説いたと教科書が記述していても，江戸後期にあって安藤昌益の思想が支配的な思想ではないことと同じである。後者はだれでもわかるが，前者はつい誤解してしまうだけのことだ。思想史は鎌倉時代に新仏教が生まれてきた意味，江戸時代後期に安藤昌益の思想が存在した意味を問い，その思想や勢力が当時にあって支配的であったか否かは問題ではない。

この誤解をより学問的に遡上に乗せたものを顕密体制論という。顕教と密教すなわち平安仏教を含めた「旧」仏教が中世社会での支配的な仏教勢力であるという考えである。顕密体制論の立場に立つ人は，この意味で，鎌倉「新」仏教は中世仏教ではないと論じる。顕密体制論の背後には権門体制論という政治史の議論が控えている。鎌倉幕府が生まれたからといって天皇の存在が無になるわけではない。いやむしろ天皇の下で，武士・公家・寺社が権門として相互補完的に並び立つ姿が中世の真の政治史像なのだと主張する。顕密体制論と権門体制論は，中世に生まれたものへの「誤解」を「現実」の立場から批判するという共通する論理構造を持つとともに，顕密体制論が権門体制論の一翼を形成する寺社勢力の分析をなすという入子構造の関係にもある。この歴史観が過去 30 年余りにわたって歴史学において豊富な生産を行い，自らを精緻化することで中世史学を牽引してきた。

問題Ｂの時期は権門体制の崩壊期であるのだが，鎌倉「新」仏教の勢力が真の宗教勢力として立ち現れるのが一向宗であり法華宗であるわけだ。問題Ｂは一見すると易しく思えるかもしれないが，両者が宗教勢力として政治的な力を確立したことを意識的に記す必要があるので，注意してほしい。

【解答のポイント】

A

①中国僧の来日，日本の僧の往来により中国風の文化がリアルタイムに入ってきた。(2)

②その範囲は仏教の教義のみならず，漢詩文・絵画・朱子学などにも及んだ。(3)

③それがその時代の特徴的な文化となりえたのは臨済宗に対する幕府の保護があったから。(2)

B

①親鸞の流れが一向宗，日蓮の流れが法華宗。(1)

②一向宗は蓮如によって北陸，近畿で教団を結成し加賀で自治を行った。(4)

③法華宗は日親などによって京都の町衆に広まり一揆を結び自治を行った。(5)

解答例

A南宋の禅僧が来日し，日本の禅僧も多く中国に往来したため，仏教とともに詩文・水墨画・朱子学など同時代の文化がもたらされ，臨済宗が幕府と結びつくことで中国色の強い文化が形成された。

(89 字)

B一向宗は蓮如により北陸や近畿の農村部を中心に講が形成され，加賀では一揆による自治を行った。法華宗は日親らが出て都市商工業者に布教され，京都では一揆を結成して一時町政を掌握した。

(89 字)

【2】

解説

【着眼点】

中世から近世にかけての日朝関係に関する問題である。史料は難しい語句が並んでいるが，わかる言葉から解答を推測することは可能だろう。問１は「海賊の暴」「朝鮮の兵船の再来」などから応永の外寇，問２は下線部の「大仏」に加え，「耳塚」から方広寺がわからなくてはいけない（朝鮮出兵において，日本人の武将は戦功として首に代えて耳や鼻を切って持ち帰り，方広寺の付近に埋めた）。また，問３で挙げられている３つの年号も基本的なものばかりだ。それゆえ，勝負はこれらの事項がきちんと説明できるかである。本問は，「基本事項の定義的理解」を問うという一橋大日本史の特色がよく出た問題なので，用語集や教科書で確認しながら復習してほしい。

【知識の整理】

●室町時代の日朝関係と，そして対馬

1392（元中９・明徳３）年，朝鮮を建国した李成桂（りせいけい）にとって，一番の悩みの種は「倭寇」対策であった。室町幕府にも倭寇禁圧を求める使いを派遣したが効果は上がらず，朝鮮沿岸には交易を求める人々が殺到していた。そこで，思い切った懐柔策に出た。交易希望者に朝鮮の官職を授け，「受職倭人」として朝貢貿易を認めよう，というのである。諸大名や諸商人には「図書」と呼ばれる印鑑が与えられ，それを外交文書に捺印することで，正規の使者である「受図書人」として通交が許可された。

日明関係が，基本的には中国皇帝―室町将軍（＝「日本国王」）という１本のパイプしかなかったのに対し，日朝関係は，朝鮮国王と将軍だけでなく，諸大名・商人と複数のラインが敷かれていたことに大きな特色がある。そして，その仲介の役割を果たしたのが，対馬の宗氏である。1419（応永 26）年には，朝鮮軍が対馬を倭寇の根拠地と見なして襲撃するという応永の外寇が起こった。そもそも，対馬島人が倭寇的性格を持っていたため，対馬島主であった宗貞茂（そうさだしげ）の死を機にとった朝鮮側の行動もあながち間違いではない。そして，対馬が倭寇の根拠地であったからこそ，宗氏がこの海域の元締（もとじめ）になれたのだともいえる。そこで，朝鮮は応永の外寇以降は宗氏を介して通交を統制しようと考え，1443（嘉吉３）年の嘉吉条約（癸亥約条（きがいやくじょう））では，宗氏に文引（ぶんいん）（渡航認可証）の発給権を与えるとともに，年間 50 艘の歳遣船（さいけんせん）の権利を認めた。一方，朝鮮の入港地には「倭館」も整備されて，乃而浦（ないじほ）（齋浦（せいほ））・富山浦（ふざんほ）（釜山）・塩浦（えんぽ）（蔚山（うるさん））の「三浦（さんぽ）」体制が確立した。

貿易には，進上（朝鮮国王への献上）・公貿易・私貿易の３つの形態があったが，中心は私貿易であった（但し，私貿易といっても役人立ち会いの下での政府公認の密貿易であった）。日本からの主な輸出品は，銅・硫黄などの鉱産物や，扇・刀剣などの工芸品で，日明貿易と変わらないが，ここではそれらに加え，東南アジア産の蘇木（そぼく）や香木なども輸出されたことに注目したい。琉球との中継貿易で手に入れた産品であるが，「倭寇」の活動範囲が東シナ海域一帯に広がっていることを考えれば，当然ともいえる。一方，朝鮮からは大蔵経や朝鮮人参も輸入されたが，木綿が大部分を占めた。朝鮮では木綿は「公木」といって租税として徴収され，貨幣としても用いられていた。当時日本では綿作が未発達であったため，庶民の衣服として大量

に輸入された。

さて，貿易の活発化とともに，倭館周辺に住みつき，密貿易などの非合法的な活動も行う者も増え始めた。いわゆる「恒居倭（こうきょわ）」である。朝鮮政府は最初は黙認していたが，1510（永正７）年，ついに大規模な暴動が発生した（三浦の乱）。ある恒居倭を朝鮮の役人が海賊と誤認して射殺した事件を機に，一斉に蜂起したのである。対馬島主宗盛順（もりのぶ）が支援したことから貿易は中断され，宗氏の必死の交渉により1512（永正９）年に壬申約条が結ばれたものの，開港場は齋浦（のち釜山）１港に制限された。

●江戸時代の日朝関係と，やはり対馬

江戸時代，対馬藩は２万石格とされていたにもかかわらず，島内では米はまったく穫れず，麦が換算2000石弱収穫できるにすぎなかった。このように，耕地に恵まれない対馬にとって，生命線は朝鮮との貿易であった。そこで，文禄・慶長の役後，まさに命懸けで和平交渉に乗り出す。1599（慶長４）年に送った使いはだれ一人島に帰ってこなかったというから，文字通り生死を賭けた戦いであった。朝鮮側が家康の国書と「犯陵の賊」（先王の陵墓を荒らした犯人）の引き渡しを要求したのに対し，対馬は国書と賊の両方をでっち上げて，1607（慶長12）年，「回答使兼刷還使（さつかんし）」の来日を実現させた。以後，交渉ごとに朝鮮人捕虜が送還され（6000人を超える），1636（寛永13）年の第４回からは「通信使」と呼ばれるようになった。

ところで，対馬藩は日朝両国のメンツを立てるため，再三にわたって国書の偽造を行っている。徳川幕府は朝鮮を華夷秩序（かいちつじょ）に位置付けて朝貢扱いし，一方で朝鮮側は対等な立場と考えていたからである。国書も書き換えなければ通らない。間に挟まれた対馬藩の涙ぐましい努力があったからこそ，荒波立てず穏便に事を済ませることができたのである。

さて，1609（慶長14）年，対馬は「日本国王使」と名乗って朝鮮に使節を派遣し，己酉約条（きゆうやくじょう）を結んだ。その結果，対馬島主には歳遣船20艘と釜山への倭館の設置が認められ，船数はだいぶ減らされたものの，中世とは違って朝鮮貿易を独占することとなった。それとともに，交易権を家臣にも分け与えることで，石高のない対馬藩が主従関係を結ぶことができたのである。

因みに，江戸時代の日朝貿易では生糸が輸入額の５割近くを占めていた。もちろん中国産である。生糸といえば，五カ所の糸割符仲間に価格を決定させ，一括購入する糸割符制度を思い出すだろうが，1685（貞享２）年の定高貿易仕法（さだめだかぼうえきしほう），さらには1715（正徳５）年の海舶互市新例などによって，長崎出島からの入荷量は減少していた。そうした中，対馬―朝鮮ルートの生糸は重宝され，対馬藩も京都に藩邸を構えて，西陣の商人を相手に利益を上げた。一方，輸出の３分の２近くは生糸の代価として支払った銀である。これは，中国が銀本位経済であったことを考えれば察しがつくだろう。とくに慶長丁銀は純度が80％もあったため，「倭銀」として朝鮮からそのまま中国へ再輸出された。

●正徳の治と将軍表記の変更

18世紀初め，６代将軍徳川家宣・７代将軍徳川家継に侍講として仕えた新井白石は，儒教的な徳治主義に基づく儀礼・制度の整備を推進した。いわゆる「正徳の治」である。彼の意図は将軍の権威高揚であり，その一環として日朝関係にも変更が加えられた。第一が待遇の簡素

化である。沿道での供応を４カ所に減らすなど，要は「格下げ」によって，関係が対等ではなく将軍の方が上であることを示そうとしたのである。そして，朝鮮国王からの国書における将軍の表記を，「日本国大君」から「日本国王」に改めさせた。これは，「大君」が朝鮮で王子の嫡子を示す称号であることを嫌ったもので，名実ともに徳川将軍が日本の支配者であることを誇示しようとしたものであった（なお，「大君」号の表記は，実は幕府の方から朝鮮側に要求したものであり，当初は「日本国王」号が使用されていて，幕府も黙認していた。「日本国王」の称号は中国皇帝から与えられたものであり，朝鮮側が国書で用いたのも，伝統的な冊封体制に則ったものであった。これを裏返せば，「大君」号の使用は中国を中心とする華夷秩序からの自立の表明であったともいえよう。新井白石はこの点で考え違いをしている）。

こうした改変には，国内でも批判が多かった。結局，次回の 1719（享保４）年の徳川吉宗の８代将軍襲職祝賀では，「祖法」を遵守する立場から再び「大君」に戻され，儀礼も旧来のものに復帰した。

【解答のポイント】

問１

事件＝応永の外寇→朝鮮側が対馬を倭寇の根拠地として攻撃

背景＝対馬島主の宗貞茂の死去とともに倭寇の活動が再び活発化

問２

名称＝方広寺

刀狩令＝一揆の防止と兵農分離の明確化のため農民から武器を没収

　→方広寺の大仏造立を名目とする

大坂の役（陣）＝徳川幕府が残存する豊臣氏勢力を滅ぼす

　→方広寺の鐘銘を口実とする（「国家安康，君臣豊楽」）

問３

15 世紀＝対馬の宗氏を仲介に室町幕府と朝鮮が国交

　→大名・寺社・豪商らも加わり多元的な貿易を展開

1510 年＝三浦の乱

　→三浦の恒居倭（日本人商人）の暴動により貿易は縮小

1592 年＝文禄の役

　→豊臣秀吉の服属要求と朝鮮出兵により国交断絶

1609 年＝己酉約条

　→宗氏の尽力により国交を回復

18 世紀＝将軍の代替わりごとに通信使が派遣される

解答例

問１応永の外寇。当時の対馬島主であった宗貞茂が死去すると，再び倭寇の活動が活発化したため，朝鮮側は対馬を倭寇の根拠地として攻撃した。問２方広寺。豊臣秀吉は1588年，一揆の防止のため刀狩令を発して農民から武器を没収したが，その際に方広寺の大仏造立を名目とした。また，徳川幕府は1614年，方広寺の鐘銘を口実に大坂の役を開始し，豊臣氏を滅亡させた。問３15世紀には対馬の宗氏を仲介として室町幕府と朝鮮との間で国交が結ばれ，大名・寺社・豪商らも加わって多元的に貿易が行われていた。しかし，1510年に恒居倭の暴動である三浦の乱が発生すると貿易は縮小され，豊臣秀吉による1592年の文禄の役で国交断絶となった。徳川幕府が成立すると貿易を再開したい宗氏の手で和平交渉が進められ，1607年に朝鮮から回答兼刷還使が送られると，1609年の己酉約条により宗氏に倭館の設置と歳遣船の派遣が認められ，以後将軍の代替わりごとに通信使が来日した。

（400字）

添削課題

解説

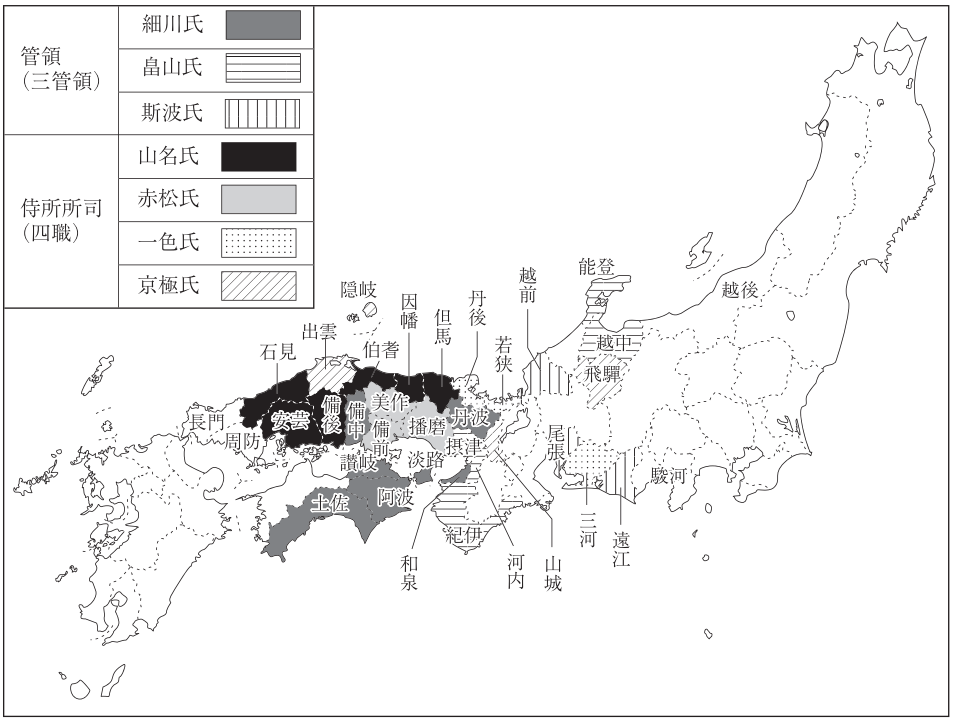
【着眼点】

室町時代のメインテーマである守護大名に関する問題である。

Ｂは，知識で解くには受験生の範囲を超えているが，リード文の(1)・(2)から容易に推定できるだろう。Ｃは義満の時代の戦乱について述べればよいことがわかる。したがって，少し手間がかかるのがＡということになる。しかし，「中央における職制上の地位」が三管領四職のことだと気付けば，後はその７つの家に関する知識が少し必要なだけとなる。

【知識の整理】

●近畿・中国・四国・中部地方の守護



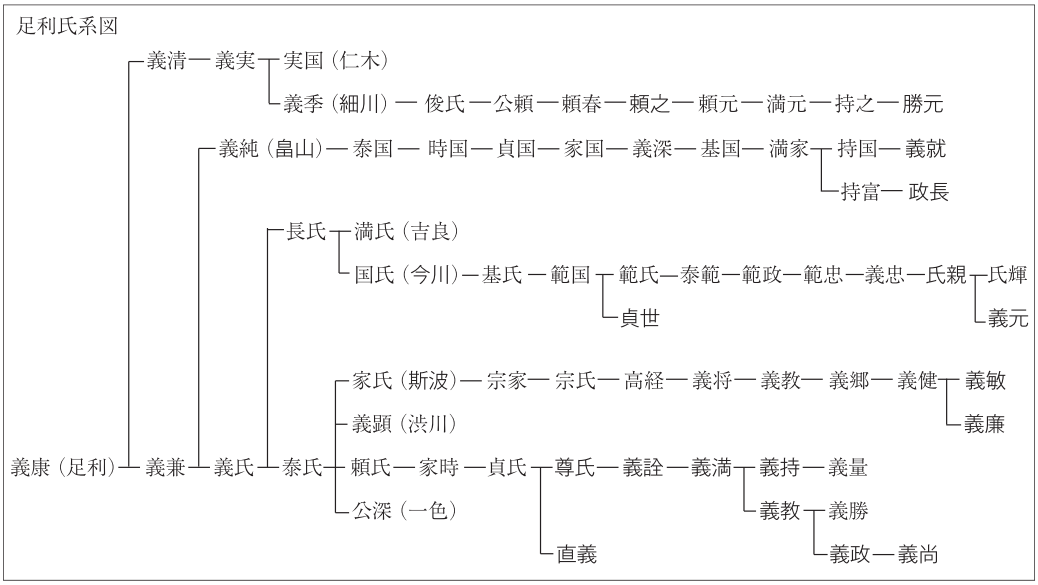
上の図は，設問にある守護の表を図示したものである。設問が，「幕府の運営や重要な政務の決定に参画した」としている守護は，地域的には，「鎌倉府の管轄および九州をのぞいた諸国」すなわち幕府のある京都に近い諸国を任国とした者ということはリード文からも明らかである。

これらの守護は足利一門と室町幕府草創期に足利尊氏に従って功績を上げた者にまず分けられよう。足利一門の守護は斯波・細川・畠山・一色・今川である。

斯波氏は，系図に示すように足利泰氏の長男家氏を祖とし，高経までは足利を名乗っていた。高経が尊氏，義詮に従って功績を上げたため，この嫡流は三管領家の１つとなった。

細川氏は足利義康の子義清を祖とする。義季の時に足利宗家の義氏が守護となっていた三河国の細川郷に拠点を移し，細川氏を称した。尊氏挙兵に際して，和氏・頼春・顕氏ら一族が功績を上げたことによって，尊氏政権で重きをなした。その後，一族内での対立もあったが，頼春の嫡男頼之が義詮の遺命によって幼い義満の管領に就任したことで三管領家の１つとなった。

畠山氏はもともと桓武平氏秩父氏の一族である。畠山重忠が北条時政の陰謀によって二俣川の戦いで滅ぼされた後，時政の娘であった重忠の妻は足利義兼の子義純に再嫁し，義純が畠山家を継ぐことになった。尊氏挙兵に義深ら畠山一族は従い功績を上げたが，観応の擾乱で一族に没落する者が多く，ようやく義深の子基国が義満に信頼され管領となったことで三管領家に名を連ねることになった。



一色氏は足利泰氏の子公深が，三河国吉良荘一色に拠点を移して一色氏を名乗ったことに始まる。尊氏挙兵に従い，九州の制圧を任務としたがうまくいかなかった。しかし，九州を引揚げ中央に戻ってからは徐々に功績を上げ，満範が義満に重く用いられたことで四職家の１つに名を連ねた。

今川氏は，国氏が父から三河国の今川荘を与えられたことからそう名乗るようになった。範国は尊氏に従って軍功を上げ，子の貞世は九州探題として九州を南朝方から北朝方に転ずることに功績があった。

次に足利一門以外のうち，一色氏以外の四職の三家について簡単に述べておこう。山名氏は清和源氏で新田氏と祖を同じくする。山名時氏が南北朝の内乱期に尊氏方の武将として活躍して勢力を伸ばすが，観応の擾乱に際して尊氏と対立，義詮の時に和解がなって幕府方に帰参した。

京極氏は宇多源氏を称する近江の佐々木氏の一族。南近江に勢力を持つ六角氏が佐々木氏の宗家筋だが，京極氏の佐々木高氏（道誉）が尊氏に味方し功績を上げたことで佐々木氏の惣領とされた。

赤松氏は村上源氏の出であるとされる。赤松則村は元弘の変で後醍醐天皇方として蜂起したが，尊氏が反後醍醐天皇の軍を発すると，後醍醐天皇方から離れて尊氏に味方した。

表中に記されている守護大名のうち残るのは越後の上杉，加賀の富樫，伊勢・美濃の土岐，近江の六角，周防・長門の大内，伊予の河野であるが，近江の六角は京極氏のところで触れたのでそれでよいだろう。

上杉氏は藤原氏の出で，丹波国の上杉荘を領有し上杉を名乗っていたが，重房の時に宗尊親王に従って鎌倉に下った。その後上杉氏は足利氏との姻戚関係を深め，足利尊氏・直義兄弟の母親も上杉頼重の娘清子だった。足利基氏の下で関東管領となった上杉憲顕（山内上杉）が上杉宗家となり，越後の守護を兼ねた。越後の守護職は子の憲栄が継いだため関東管領山内上杉家と越後上杉家は密接な関係にあった。永享の乱の時の関東管領上杉憲実は越後上杉家から入って山内上杉家を継いだ人物である。

富樫氏は，『今昔物語集』の「芋粥」の説話で有名な藤原利仁を始祖とする，加賀の在庁官人として勢力を伸張した一族である。鎌倉時代にはすでに加賀国有数の豪族であったが，南北朝の内乱期に加賀の守護となり，その後一貫して室町幕府の側に立った。

土岐氏は清和源氏，源頼信の兄頼光の子孫である。南北朝の内乱期に尊氏に従って功績を上げた。侍所の所司となる家は四職といって京極・山名・赤松・一色であるとされるが，所司の職に就いた人物としては，一色氏よりも土岐氏の方が多い。

大内氏は百済からの渡来系氏族の末裔を称する。周防国で勢力を持ち，鎌倉時代には西国の有力御家人として活躍していた。リード文の⑵にある「かつて幕府に反抗したこともあった」とは，大内義弘が足利義満によって追討された応永の乱のことをさしている。

河野氏は古代には越智氏と称し，郡司も務めた歴史の古い伊予地域の豪族である。承久の乱で上皇方についたり，元弘の変で幕府方についたりと存続の危機にも陥ったが，のちに尊氏に応じて，伊予の守護の職を確保した。

●東国の守護

同時期の鎌倉府管轄下の諸国の守護を見てみよう。

上野は上杉氏，下野は結城氏，常陸は佐竹氏，武蔵は上杉氏，下総は千葉氏，上総は上杉氏，安房は上杉氏，相模は一色氏，甲斐は武田氏，伊豆は上杉氏で，陸奥・出羽には守護は設置されていない。

鎌倉府の管轄領域の守護は原則として鎌倉に在住することを義務付けられ，鎌倉府の政務に関わった。

●九州の守護

同時期の九州諸国の守護を見てみよう。

豊前は大内氏，豊後と筑後は大友氏，肥前は渋川氏，肥後は菊池氏，日向・大隅・薩摩は島津氏が守護であった。

大友氏と島津氏は鎌倉時代以来の守護の家である。菊池氏は肥後の地方豪族であるが，南北朝期に九州が南朝方であった時に，南朝勢力の中心であった。

九州は南北朝の内乱期の当初は南朝方であったが，今川貞世によって，北朝方に転じた。しかし貞世の勢力の増大を嫌った足利義満は，貞世から九州探題の地位を奪った。代わって九州探題となったのが足利一門の渋川満頼であった。しかし，渋川氏の九州支配はうまく行かず，

この設問の頃少弐氏によって博多を追い出され肥前に勢力を残すだけの存在となっていた。このことが大内氏の九州の押さえとしての存在意義を高めたのだった。

【解答のポイント】

A

幕府の運営や重要な政務の決定に参画した守護

畿内周辺の地域の守護

足利一門や室町幕府創建の功労者

職制上の地位…管領・侍所の所司

B

大内…九州の備え

今川・上杉…鎌倉公方の備え

C

土岐氏の乱，明徳の乱，応永の乱など実例を挙げる

有力守護の家の内部対立を扇動

勢力を削ぐ

解答例

A足利氏の一門や室町幕府創建時の功労者であり，畿内やその周辺の国の守護に任ぜられ，管領や侍所の所司など幕府要職に就いた。

（60字）

B鎌倉府の管轄領域と接する上杉，今川両氏は鎌倉公方に対し備え，九州の入口にいる大内氏は自立性の強い九州の大名を牽制した。

（60字）

C明徳の乱のように有力守護家の内部対立を利用し勢力を削いだ。

（30字）